

が完遂を要する。同時に海上輸送の損害防止対策、航空兵力の増加特に航空機増産方策及電波兵器の技術的解決は何れも喫緊を要する重大問題である。

大本營は右の判決の下にその結論を実行に移し具体的処置を採つた。

二 中部太平洋に対する兵力増強

中部太平洋方面艦隊及才三十一軍の新設

昭和十八年秋南東ラバウル方面に於ける彼我航空兵力の差が次第に大きくなつて来たので、我が海軍は母艦航空兵力をも同方面に増加して戦勢の挽回を図つたが、敵の進攻速度を若干遅延せしめ得たに過ぎなかつた。他方敵はマーシャル方面及ニューギニア方面の反攻を強化し昭和十九年二月一日マーシャル諸島の中樞基地クエゼリン島に來攻

して同島を占領すると共に続いてブラウン諸島に進攻し二月十七日六は始めてトラック諸島に機動部隊を以てする空襲を実施し、我が南東方面作戦の背後を脅威するに至つた。更に二月二十三日にはサイバン・テニヤン島方面の初空襲を実施すると共にアドミラルティ諸島をも占領するに至り、敵の進攻速度は次々に増加し、我が防衛上の要域たる内南洋に対する敵の攻撃は時日の問題となつて来た。

以上の状況に対処する為昭和十九年初頭大本營は中部太平洋方面の防衛を更に速に強化するに決し、逐次処置を採つた。即ち海軍としては二月上旬連合艦隊の水上部隊主力の前進根據地をトラックからバラオに変更し、連合艦隊司令部も亦同所に於て作戦指揮を執り、又二月中旬前年七月以来大本營直轄部隊として編成訓練中の才一航空艦隊主

力を内南洋及比島方面に進出待機して連合艦隊の作戦に協力せしめた。
この航空部隊は三月十五日には連合艦隊に編入せられ又ラバウル方面から後退せしめた基地航空部隊を改編して内南洋方面に配属した。又陸軍としては二月十日満洲にある才二十九師団を、二月二十一日新に編成した才一乃至才八派遣隊をこの方面に派遣して連合艦隊司令長官の指揮下に入らしめると共に要塞歩兵隊十二師及び要塞砲兵隊、要塞工兵隊各一師を父島要塞司令官（司令官立花芳夫少将）の隷下に入らしめ又二月二十五日には才三十一軍の戦闘序列を令しこれ亦連合艦隊司令長官の指揮下に入らしめた。

才三十一軍は軍司令官に陸軍中将小畑英良、軍参謀長に陸軍少将井杵敬治補職せられ、既に派遣せられ又は派遣中の才二十九、才五十二

七

0389

師団、海上機動才一旅団、南洋才一乃至才五支隊、才一乃至才八派遣
隊及父島要塞部隊等の外新に増加せられた才三十五師団（四月上旬才
二軍に転属せられた）及軍直部隊を以て編組せられた。その後三月下
旬在滿の才十四師団を、四月上旬内地にある才四十三師団を軍の編組
に入れられた。

大本營は四月四日新に中部太平洋方面艦隊を編成し方面艦隊司令長
官に海軍中將南雲忠一親補せられた。同方面艦隊は連合艦隊司令長官
豊田副武海軍大將の作戰指揮下に入り中部太平洋方面の防備を担任せ
しめられることとなつた。方面艦隊は従来同方面に於て作戰中の才四
艦隊と新に編成せられた才十四航空艦隊を基幹とし、又同方面に配屬
せられている陸軍部隊才三十一軍をその指揮下に入らしめられた。才

0390

十四航空艦隊は従来内南洋方面にあつた才十一航空艦隊の航空部隊の大部を基幹として四月四日編成せられた部隊であつた。

昭和十九年三月大本營は「松輸送」と呼ばれる輸送作戦を実施し海上輸送力の大部をあげて中部太平洋方面に対する優先輸送を実施し、迅速なる兵力展開を実行した。輸送は敵潜水艦の攻撃により甚だからざる損害を蒙つたが軍の兵力は著々増強せられ五月下旬に於ける才三十一軍の基幹兵力は左の如くであつた。その兵力中才百九師団は小笠原所存の兵力を改編したものであつた。

才三十一軍司令官

中将 小畑 英 良

才三十一軍司令部（サイパン）

トラック地区集団

集團司令官 才五十二師團長 中将 齋 倉 俊三郎

才五十二師團 (トラック)

獨立混成才五十一旅團

獨立混成才五十二旅團

北部マリアナ地区集團

集團司令官 才四十三師團長 中将 齋 藤 義 次

才四十三師團 (サイパン)

獨立混成才四十七旅團

南部マリアナ地区集團

集團司令官 才二十九師團長 中将 高 品 彪

才二十九師團 (グアム)

獨立混成才四十八旅團

小笠原地区集団

集団司令官

才百九師団長

中将 栗林忠道

才百九師団（硫黄島）

パラオ地区集団

集団司令官

才十四師団長

中将 井上貞徳

才十四師団（パラオ）

独立混成才四十九旅団

独立混成才五十三旅団

直轄部隊

独立混成才五十旅団

海上機動才一旅団

0393

(註) 旅団以下の部隊は省略す

陸海軍中央協定

昭和十九年三月二十五日大本營は中部太平洋方面作戰に關する陸海軍中央協定を指示した。その要旨は左の如くであつた。

一、作戰目的

來攻する敵を撃破して中部太平洋方面の要域を確保し該方面よりする敵の作戰企図を挫折せしむるに在り

二、作戰準備一般の要領

陸海軍は緊密に協力し作戰準備の促進を期す

海軍は昭和十九年春頃を目途としてカロリン、マリアナ及小笠

原方面に於ける作戰を速急に強化す

0394